日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所
『日本福祉大学社会福祉論集』第102号　2000年2月

文学と福祉の接点

―ディケンズが『オリバー・ツイスト』に託したもの―

小　泉　純　一

福祉とは人間が幸せに生きる術を模索するものであろう．その意味で福祉とは文化の一つの形態である．それではこれを逆転させて，文化とは福祉であると言うことは可能であろうか．もしくは，そう問うことに積極的な意味を見出せるであろうか．私がここで問いかけたいことは，福祉にかかわる問題を社会福祉の問題として絞り込むのではなく，そうした問題を社会福祉以外の領域からアプローチすることの是非であり，その有効性についてである．そのための一つの事例として，チャールズ・ディケンズ Charles Dickens（1812-70）の『オリバー・ツイスト』*Oliver Twist*（1838）を素材として取り上げ，社会福祉にかかわる問題と文学の相互関係について考察し，文学と社会福祉の接点を明らかにする．

『オリバー・ツイスト』を素材として選んだ理由は二つある．一つには新救貧法が悪名をはせていた十九世紀前半イギリスの社会福祉の状況が描かれている点に求められる．社会福祉の歴史を学ぶうえで記念碑的作品となっているからだ．(1) ディケンズが当時の社会状況のどのような部分に矛盾を感じていたのかを知ることで，当時のイギリス社会の現実を知るにとどまらず，現在の日本社会との共通性や異質性を確認することも可能であろう．もう一つは，福祉に対する考え方の変遷を知る点にある．現在の日本と十九世紀イギリスの福祉観の比較だけではなく，『オリバー・ツイスト』が日本に紹介され，翻訳されてきた時の流れの中で，福祉にかかわる用語が日本にどのように紹介され，消化されてきたのかを確認することができる．

文学作品として『オリバー・ツイスト』を取り上げた場合，ディケンズのほかの作品と比較して必ずしも評価は高くない．生まれながらの孤児オリバーの存在感が希薄であること．悪人の存在感にはリアリティーや迫力があるのに，善人の側はみな類型的であることなどが指摘されてきている．これらの前提を踏まえた上で，ディケンズがどのようにストーリーを展開しようとしたかではなく，どのような問題意識を持ってこの作品を執筆したのかに焦点を合わせ，この小説を読み解いていく．

ディケンズの作品の背景にあるのは十九世紀大英帝国のありさまであることはいうまでもない．『オリバー・ツイスト』の場合にさらに特徴的なことは，言葉の表現の仕方やものの考え方のレベルでもその時代性が強調されているところにある．この小説の書き出しを読む際に，苛立ちを

感じない読者は少ないのではないだろうか.

> Among other public buildings in a certain town which for many reasons it will be prudent to refrain from mentioning, and to which I will assign no fictitious name, it boasts of one which is common to most towns, great or small, to wit, a workhouse;[(2)]

この文章を読みにくくさせている理由は，この文章の趣旨が二つに分裂している点にある．この文の趣旨は「ある町の公共の施設にワークハウスというものがありました」である．一般的に言って，英語では文章の頭の部分で趣旨が明らかになるのが普通だが，この文章の場合は文末にくるまで何を言いたいのかが伝わらない．また副詞句や形容詞節の存在は上で述べた趣旨をわかりやすく説明しているのではなく，迷い道へと導くかの印象を持たせると同時に，仰々しさを感じさせる．たとえば「名前を述べるのを差し控えるほうが慎重なことでしょう」とか「どんな町にもあってその存在を誇っている」などの表現から読み取るべき事柄は，いわゆる十九世紀的なお上品な意識であったり，ワークハウスへの差別意識というべきであろう．言いかえるなら，お上品でお金持ちな上流階級と悲惨な現実を強いられている貧民が同じ社会にすむことで，社会が二つに分裂し，それを把握するには本音と建前を使い分けざるをえないこと．またワークハウスの存在は誇りを持てるものである点については，誇りの持ち方についても本音と建前を使い分けなくてはならない．貧民を救済できる点に誇りを感じる場合と，厄介者でしかない貧民問題を処理ができる点に誇りを感じる二つの場合が考えられる．当時の社会政策を批判的に見ているディケンズの視点に立つなら，ワークハウスについて問題が複雑に絡み合っていることを理解することで，韜晦な書き方の背後にある彼の本音にたどり着くことができる．

イギリスの福祉の歴史を学ぶ上で，救貧法と救貧院（ワークハウス）がキーワードであることは言うまでもない．『オリバー・ツイスト』を読み解く上でも，この二つの用語を正確に理解する必要があるので，簡単にまとめておく．まず，ワークハウスについてここで注意しておきたいことは英語でのニュアンスと日本語に翻訳した際のズレである．漢字で読めば貧しい人を救う施設と読めるが，英語の定義では必ずしもそうではない．

> *workhouse*: An *indoor relief* form of "assistance," common in various countries in the eighteenth century, in which poor people who received help had to live and work in special facilities. The government contracted with private individuals to feed and house these people in exchange for the work that they could do. The programs, which housed infants, children, the aged, handicapped, and diseased as well as able-bodies adults, were phased out in the late eighteenth century in favor of slightly more humane *almshouse* and *outdoor relief* programs.[(3)]

イギリスに限定されたものでないし，時代による変化があることを確認した上で，それは確かにヨーロッパ諸国において貧民を収容し救済する施設であったのだが，その代わりに労働を強制

する場であること．収容の対象としては，貧民以外にも，子ども，老人，障害者，病人があげられていること．アームズハウス[4]や在宅での施設外救済のほうがより人道的だとされている点を見逃してはならないだろう．付け加えて言うなら，収容の対象となったのは，精神病患者や犯罪者も含まれることがあり，刑務所や懲治院と大差ない場合もあったようだ．ワークハウスは通例救貧院と翻訳されているが，労役所あるいは就労所としている場合もある．

イギリス人にとってワークハウスのイメージとはどのようなものであるのかを考えるとき参考になるのは，デビッド・リンチが監督した『オリバー・ツイスト』(1948) の冒頭の場面である．夕暮れの嵐の中を弱々しく歩く一人の女性がある建物にたどり着く．その建物のシルエットを遠景で写した直後に，門の扉の鉄格子に組み込まれている“Parish Workhouse”という文字がアップで映し出される．そこで暗示されているものは，何か不吉なことが起こるのではないかという不安感であり，非人間的な冷たさである．安全な場所にたどり着いた安心感などではないのだ．十九世紀のイギリス人にとってのワークハウスとは，人権を保障する福祉施設ではなく，貧民を強制的に収容する恐怖の場所であったと考えるべきだろう．日本語の救貧院という用語は救貧法とセットで考案されたものと思うが，少なくとも『オリバー・ツイスト』でのワークハウスは，強制的に働かされるという点で，労役所とするほうが誤解は少ないだろう．

ワークハウスの日本語訳としては救貧院という言葉が定着しているが，それ以外の翻訳語も考案されている．そもそも『オリバー・ツイスト』の翻訳は翻案も含めると六種類存在している．最も早く日本にこの小説を紹介したのは堺利彦（1870-1933）だった．明治45年に場所を日本に置き換えて『小桜新吉』というタイトルでダイジェスト版を発表している．堺はワークハウスについて「養育院」を使っている．全訳を発表したのは馬場孤蝶（1869-1940）が最初で，昭和14年のことだった．馬場は「救貧院」を使っている．その後翻訳されたものの中で，北川悌二氏は「教区貧民院」としているが，それ以外では「救貧院」が使われている．イギリスの福祉制度についての研究書では，先に述べたように「労役所」と呼んでいるものもある．

救貧法（プアーロー）についてもその成立の経緯を簡単にまとめて，英語と日本語でのズレを確認しておきたい．福祉の源は宗教に求められる．西欧のキリスト教であれば，神の人間に対する慈悲の心や富める者の贖罪意識がもとになって，貧しい人や体の不自由な人との助け合いが行われた．しかし，中世から近代に時代が移行し，中世までの教会を中心とした世界観が崩壊するにつれ，キリスト教に基づく慈善の考え方は社会的には崩壊してしまった．キリスト教が人々の生活に与えてきた秩序がゆるみ，他人を助けることが当たり前のことでなくなりはじめたのである．一方社会構造の変化についてイギリスを例に取るなら，十五世紀以来牧羊のための大規模牧場が必要となり，農民から土地が奪われ，その結果浮遊貧民化した農民が都市に職を求めて流れ込む．それに産業革命による社会構造の変化が拍車をかける．その結果都市における貧民問題を放置できなくなり，救貧法が施行されることになる．救貧法の趣旨の半分は貧民の救済であったろうが，残りの半分は社会不安を起こしかねない貧民を管理するための社会対策であった．[5] 用語の翻訳に関して考えるなら，プアーローとは，貧民救済の法律であると同時に，貧民対策としての法律であるのだ

から，貧民法としたほうが正確だったのではないだろうか．

イギリスにおける救貧法は近代に入って成立した．人権としての福祉の考え方が二十世紀になって受けいられる迄，救貧法はイギリスの福祉政策の柱であった．まずエリザベス一世の時代にエリザベス救貧法として集大成されたが，時代の変化とともに様々な矛盾が生じてきたので1834年に新救貧法が打ち出されるにいたる．『オリバー・ツイスト』の時代背景にはこの新救貧法が存在している．エリザベス救貧法と比べて新救貧法はより貧民対策に重点が置かれていた点に特徴があり，貧民救済の点では改悪であったことが指摘されている．日本語の訳語では「救貧法」が定着しているが，『オリバー・ツイスト』の訳者によっては，貧民法であったり貧民救助法なる用語を使っている場合もある．「救貧法」とする場合には貧困者を助けると言うイメージが固定するが，プアーローの意味の幅はそこにおさまり切らない．文字通り法律自体の貧しさを指摘することも可能である．貧困者の保護の視点から見るのか，あるいは貧困者の管理対策の視点で見るかでプアーローの表情は正反対に変わるのではないだろうか．

ディケンズは救貧法が改悪された自分と同時代の様子を描くために，『オリバー・ツイスト』の冒頭でワークハウスを取り上げている．一人の女がワークハウスにたどり着く．彼女はやって来るなり産気づいて，男の子を出産するのだが，赤ん坊の顔を一目見るなり力つきて死んでしまう．赤ん坊は精いっぱい産声をあげるが，それを歓迎するものはいない．

> Oliver breathed, sneezed, and proceeded to advertise to the inmates of the workhouse the fact of a new burden having been imposed upon the parish, by setting up as loud a cry as could reasonably have been expected from a male infant who had not been possessed of that very useful appendage, a voice, for a much longer space of time than three minutes and a quarter. (OT, 46)

本来なら「ニュー・ボーン・ベイビー」と頭韻を踏むところだが，「お荷物（バードン）」としたために，ワークハウスで誕生したオリバーが教区にとっての重荷でしかないことが一層強調されている．その意味では，ここの語りはワークハウスを管理する側の視点からのものである．この視点をディケンズはワークハウスのあり方を批判するために借用している．そのために作品の語りの基調音は皮肉っぽいものになる．相手の立場をディケンズは認めているわけではない．相手の態度を批判するために相手の考え方を借用して語っているのだから．

ワークハウスには子どもも収容されていた．両親が収容されればその子どももワークハウスに収容されることになる．勿論家族で暮らすことはできず，一家はバラバラに収容されたらしい．また，親を失った孤児もワークハウスに収容されたであろう．オリバーが際立っているのは，ワークハウス生まれで，外の世界を知らないこと，唯一の肉身である母を失い全く寄る辺がないことである．ネイチャー・チャイルドとは私生児であると同時に，社会の枠をはみ出た自然の子どもと解釈できるが，ワークハウスの外の世界を知らず，誰も肉身のいないオリバーは，ワークハウスを管理している教区の子に他ならない．

> But now that he was enveloped in the old calico robes, which had grown yellow in the same service, he was badged and ticketed, and fell into his place at once —— a parish child —— the orphan of a workhouse —— the humble half-starved drudge —— to be cuffed and buffeted through the world, —— despised by all, and pitied by none.
>
> Oliver cried lustily. If he could have known that he was an orphan, left to the tender mercies of churchwardens and overseers, perhaps he would have cried the louder. (OT, 47)

教区のワークハウスで育てられる孤児に対するディケンズの素直な気持ちをここに読み取っていいだろう．オリバーの背後には，長年の使用によって黄ばみ着古されたキャラコのベビー服を共有した孤児たちがいる．オリバーという一人の子どもというより，ワークハウスに生まれた孤児にディケンズの関心はあるというべきだろう．ワークハウスに生まれるということは，手錠をはめられるように拘束を受け，傷つけられ，誰からも軽蔑され，誰にもかわいそうに思ってもらえない．その代わりに，教区委員や教区の監督官のやさしい慈悲にゆだねられる．しかしこの慈悲については当然皮肉である．教区委員たちのやさしい慈悲とは，仮にキリスト教に由来する慈善の精神をうわべだけ借りたとしても，実体は貧民対策に他ないのだから，弱者への思いやりもうわべだけのものに過ぎない．オリバーがもしそのことを知っていたなら「もっと大きな声で泣いたことでしょう」とすることで，ワークハウスの実体をディケンズは攻撃している．

上の引用部で注意すべき点は「誰にもかわいそうに思ってもらえない」と「教区委員や監督官のやさしい慈悲にゆだねられた」が対比されていることだ．ディケンズは前者には“pity”を，後者には“mercy”を使っている．ここでディケンズは，“mercy”ではキリスト教の慈善のニュアンスを暗示させ，“pity”の方は人間の自然な感情に基づかせているのではないだろうか．教区委員の慈悲がうわべだけのものに過ぎないことは先に述べた通りである．だからと言ってディケンズは他者への同情の気持ちを否定しているわけではない．破産によって父が投獄された際，子どもだったディケンズはしばらくの間家族と離れて，働かなくてはならなかった．そのときに経験した世間の冷たさ，屈辱感が作家としての原動力になっていることが定説となっている．おそらくその時のディケンズは「誰からも蔑まれ，だれにもかわいそうに思ってもらえない」と感じたことだろう．その時の自分の気持ちをディケンズはオリバーに仮託している．哀れな人や貧しい人を救済する制度や政策があるだけでは不充分で，それらをとりまく人間が相手の気持ちを共有すべきだとディケンズは願っている．しかしオリバーのこの段階での現実において，その可能性はゼロだ．

妊娠したオリバーの母がワークハウスにたどり着き，そこでオリバーを出産した後亡くなってしまうと，オリバーの養育問題が持ち上がった．エリザベスの救貧法時代から，イギリスの福祉制度は教区（パリッシュ）単位で行われていた．ワークハウスは教区の管轄化にあり，ワークハウス内には救貧委員会（オリバーが生きているボードとはどんなものかと疑問に思ったもの）が置かれていた．その下でワークハウスの管理を任されていたのが教区吏である．

The hungry and destitute situation of the infant orphan was duly reported by the workhouse authorities to the parish authorities. The parish authorities inquired with dignity of the workhouse authorities, whether there was no female then domiciled in 'the house' who was in a situation to impart to Oliver Twist the consolation and nourishment of which he stood in need. The workhouse authorities replied with humility that there was not. Upon this, the parish authorities magnanimously and humanely resolved, that Oliver should be 'farmed', or, in other words, that he should be dispatched to a branch-workhouse some three miles off, where twenty or thirty other juvenile offenders against the poor-laws rolled about the floor all day, without the inconvenience of too much food or too much clothing, under the parental superintendence of an elderly female who received the culprits at and for the consideration of seven pence-halfpenny per small head per week. (OT, 47-8.)

教区の委員会とワークハウスの委員会がオリバーの処遇について数回やり取りをした結果，ワークハウス内で赤ん坊を育てるのは不可能との結論に達し，オリバーは近くにあるワークハウスの分院に送られる．そこには二三十人の子どもたちが収容されている．かれらは，ワークハウスでの作業が行なえる年頃になるまで，そこで過ごすことになる．子どもたちは救貧法の違反者とされている．救貧法の世話になることをディケンズはこのようにとらえたのだが，ワークハウスは社会問題を引き起こしかねない貧民対策として行われているものであり，ワークハウスの収容者は福祉サービスの受給者などであるはずがなく，犯罪者予備軍的な位置付けをされていたとも解釈できる．

『オリバー・ツイスト』には魅力的でリアリティーのある悪人が何人も登場する．教区吏のバンブルもその一人である．分院にあずけられたオリバーを教区吏のバンブルが引き取りに行ったところ，分院の責任者のマン夫人が門の鍵をあけておかなかったことにバンブルの怒りは向けられる．

Although this invitation was accompanied with a curtsey that might have softened the heart of a churchwarden, it by no means mollified the beadle.

'Do you think this respectful or proper conduct, Mrs. Mann,' inquired Mr. Bumble, gasping his cane, 'to keep the parish officers a-waiting at your garden-gate, when they come here upon porochial business connected with the porochial orphan? Are you aware, Mr. Mann, that you are, as I may, a porochial delegate, and a stipendiary?' (OT, 50)

"beadle" は本来伝令を意味していたが，教区委員 "churchwarden" が任命する教区の下級官吏を十六世紀後半から意味するようになった．その職務は教会での秩序維持，軽犯罪の処罰のほか，伝令の仕事もあった．つまり，決定権を持たない小役人という性格だ．自分より身分の上のものにはへりくだり，身分の下のものには威張りまくる点では，いわゆるスノッブ的な性格を帯びている．マン夫人に対する文句でも，自分が教区の務めをはたしていることを強調するために「教区」とその形容詞が四回も使われている．言うまでもないが，「教区」という権威をバンブル

は身にまとおうとしている．しかしながら，バンブルの発音に基づいていると思われる「教区」の形容詞はつづりに誤りがあり，間違った発音をさせることで，この場面は漫画的なおかしさを誘発している．間違った言葉を使えば使うだけ，バンブルの軽薄さが強調されることになるからだ．

ワークハウスで働けるだけに成長したオリバーは，ワークハウスの分院である孤児院からワークハウスにつれてこられる．まず救貧委員との面接があり，その際オリバーは自分の仕事を割り当てられる．

> 'Well! You have come here to be educated, and taught a useful trade,' said the red-faced gentleman in the high chair.
>
> 'So you'll begin to pick oakum tomorrow morning at six o'clock,' added the surly one in the white waistcoat. (OT, 54)

教育がワークハウスで行われるはずがないので，それは上辺だけの言葉に他ならない．役に立つどのような職を身につけるかというと，オークム作業である．オークムとは古くなったロープをよりほぐしたもので，船の水漏れを防ぐために板の継ぎ目に詰め込まれて使われた．オークムをより分ける作業は，囚人かワークハウスの収容者の仕事と当時理解されていた．根気がいる割には達成感の少ない作業である．ワークハウスを出てしまえば，普通の世間ではそんな技術は役にたつはずもない．ワークハウスの中にいてこそ，社会の役にも立つ，有益な作業と言える．もっともワークハウスを出所後，刑務所の厄介になるという暗黙の了解があるとすれば，のちのち役に立つとも言えるが，そこまで底意地の悪い発言とは思えない．

『オリバー・ツイスト』には1834年に議会で可決された新救貧法への言及がある．それを発案したのはオリバーの面接を行った救貧委員会という設定になっている．

> The member of this board were very sage, deep, philosophical men, and when they came to turn their attention to the workhouse, they found out at once, what ordinary folks would never have discovered —— the poor people liked it! It was regular place of public entertainment for the poorer classes; a tavern where there was nothing to pay; a public breakfast, dinner, tea, and supper all the year round; a brick and mortar elysium, where it was all play and no work. 'Oho!' said the board, looking very knowingly; 'we are the fellows to set this to rights; we'll stop it all, in no time.' So, they established the rule, that all poor people should have the alternative (for they would compel nobody, not they), of being starved by a gradual process in the house, or by a quick one out of it. (OT, 55)

誇張とデフォルメの多用された『オリバー・ツイスト』はクセの強い作品である．作品が発表された当時の書評の中には，救貧法とワークハウスの問題を批判するためにこの作品が書かれたことは認めた上で，「ディケンズが面白おかしく描いている虐待は誇張されているだけでなく，十中八九存在していない」[6] と非難するものもあった．救貧法が改悪された理由をディケンズは

救貧委員会の発見に設定しているが，常人には思いも着かないことを考え出した救貧委員たちへの皮肉といい，ワークハウスの収容者はワークハウスが気に入っているという仮説にしても，荒唐無稽な印象を受けるのが自然ではないだろうか．つまりディケンズはありのままの事実を書く気はなかったのだ．その代わりに一つの事実を誇張し，デフォルメすることで，問題の本質を拡大して見せようとしている．ここでの事実とはワークハウスの予算が切りつめられ食糧事情が不充分であったこと，貧民救済はワークハウスで行うとしたため，ワークハウスの外での貧民対策が行えなくなったことである．

エリザベスの救貧法と新救貧法の違いの一つは，新救貧法においては貧困者の救済は施設で行うこととし，在宅での援助を縮小したことにある．『オリバー・ツイスト』の中では教区吏のバンブルがワークハウスの女性監督者コーニー夫人を訪れた際話題になっている．コーニー夫人に在宅での援助は不適切なものですねと問いかけられて，バンブルは次のように答える．

> 'Mrs Corney,' said the beadle, smiling as men smile who are conscious of superior information, 'out-of-door relief, properly managed: properly managed, ma'am: is the porochial safeguard. The great principle of out-of-door relief is, to give the paupers exactly what they don't want; and then they get tired of coming.' (OT, 218)

教区吏の立場に立った，逆説的で，教条的な答えである．教区吏としてはワークハウスに収容する人数は少ないほうが管理を行いやすい．そのためには在宅での援助も否定するものではない．但し，それも援助の対象者を増やすことが目的ではなく，援助を行っているという実績を示すことが目的であろうから，相手が本当に必要としているものではなく，ぜんぜん必要ではないものを与えることで，結局援助を求めにこなくさせることが究極の目的となる．小説のこの場面には，施設外での援助が縮小された当時の現実が反映していると考えていいだろう．

『オリバー・ツイスト』の中でもっとも印象に残る場面の一つはワークハウスの食事の際にオリバーがお代わりを求める場面である．この場面はワークハウスの食糧事情がどのようなものであったかを知る手がかりになるだけでなく，ワークハウスの職員が収容者をどのようにとらえていたかをそこから理解することができる．与えられる食事は，一皿のスープ．特別な祝日にだけ二オンス四分の一のパンが与えられる．子どもたちはスプーンで皿をすくいつくすので，洗わなくてもよいほどにきれいになる．それほどの分量しか与えられないので，子どもたちは徐々に飢えの苦しみにおそわれる．ついには子どもの一人が，寝ているうちに隣の小さいやつを食ってしまうかもしれないとほのめかすようになり，子どもたちは話し合いを持った．話し合いの結果，誰か一人をくじで選び，食事をみんなが終えた後にその選ばれた者がお代わりをもらいに行くことに決定する．そして，運悪く選ばれたのがオリバーであった．

> 'Please, sir, I want some more.'
> The master was a fat, healthy man; but he turned very pale. He gazed in stupefied

astonishment on the small rebel for some seconds, and then clung for support to the copper. The assistants were paralysed with wonder; the boys with fear.

'What!' said the master at length, in a faint voice.

'Please, sir,' replied Oliver, 'I want some more.'

The master aimed a blow at Oliver's head with the ladle, pinioned him in his arms, and shrieked aloud for the beadle.

The board were sitting in solemn conclave, when Mr. Bumble rushed into the room in great excitement, and addressing the gentleman in the high chair, said,

'Mr Limbkins, I beg your pardon, sir! Oliver Twist has asked for more!' There was a general start. Horror was depicted on every countenance.

'For more!' said the Mr Limbskins. 'Compose yourself, Bumble, and answer me distinctly. Do I understand that he asked for more, after he had eaten the supper allotted by the dietary?'

'He did, sir,' replied Bumble.

'That boy will be hung,' said the gentleman in the white waistcoat; 'I know that boy will be hung.' (OT, 56-7)

「お代わりをください」と頼むだけでこれほどの騒動に発展する様子は漫画的で，コミカルな部分である．まずは食事の係りをしている太って健康そうな男が顔面蒼白になって，その反逆者を取り押さえ，教区吏に助けを求める．教区吏は即座に特別会議室にいる救貧委員に事態を報告する．委員たちはぎょっとして，恐怖におそわれる．事態の確認が終わると，そんなやつは縛り首だと委員の一人が発言する．食事を切り詰める方法を選んだ委員の立場に立てば，自分たちの政策にたてつくような輩の存在は言語道断であって，断固とした態度をとらざるを得ない．それが組織であるのだから．とはいえ，ワークハウスの管理者側の反応は，過剰であるように感じられる．ディケンズのねらいは組織を維持管理することにのみとらわれている姿を強調することにあったのだろう．

『オリバー・ツイスト』の世界は，日本の時代劇のように善玉と悪玉に完全に分かれている．[7] そのはざ間で，まだ純真なオリバーがどのように成長するのかがこの小説の骨格の一つになっている．ここまではワークハウスに関わる俗物的存在を取り上げてきたが，善玉もいないわけではない．食事に文句をつけたオリバーをワークハウスから追い出して，徒弟奉公（アプレンティス）に出すことを救貧委員は決定する．[8] 即刻ワークハウスの外壁に五ポンドを謝礼金としてつけるのでワークハウスの子どもの徒弟奉公先求むという内容のびらが張り出された．ワークハウスとしては，謝礼金をつけることで厄介払いをしたいのだ．金に困った煙突掃除夫がその広告を見て，飛びついてくる．児童福祉の整っていなかった当時，子どもの就労条件は極端にひどいものだった．特に煙突掃除は体の小さい子どもには適していたが，不幸な事件がなかったわけではない．[9] 委員は，子どもの煙突掃除夫が煙突の中で窒息して死んだ話題を持ち出して，持参金を値切り始め，三ポンド十五シリングで商談が成立する．

しかし，ワークハウスの子どもを徒弟に出すには治安判事の承認が必要なため，オリバー，バ

ンブルと委員たちは承認を得るため判事のもとに出廷する．審理は最初順調に進行するのだが，途中からオリバーの顔色が悪く何かにおびえていることに判事が気づき，どうしたのかとたずねると，オリバーは床にひざまづきもとのワークハウスに戻りたいと判事に手を合わせて願い出た．びっくりしたバンブルと委員は何とかしようとするのだが，何を言われても判事の決断は変わらない．

> 'We refuse to sanction these indentures,' said the old gentleman, tossing aside the piece of parchment as he spoke.
>
> ... 'Take the boy back to the workhouse, and treat him kindly. He seems to want it.' (OT, 66)

当時治安判事の職につけるものは，国王の手足として地方行政で働いてきたものたちで，判事の職自体は無給の名誉職的なものであった．[10] 社会的な身分から見て，治安判事は生活に不安のない上流階級に属し，地域の名士から選ばれる教区委員とは身分が違う．まして，教区吏とは雲泥の差であろう．治安判事は，生活に困った子どもにとってワークハウスは有益なものであり，そこで子どもたちは親切に面倒を見てもらえると考えているわけである．教区委員はオリバーを徒弟奉公に出してしまえば，一人分の食費がかからなくてくすむと考えている．ワークハウスの理念と現実のギャップがここに集約されている．このままでは，両者はすれ違うばかりで，システム自体をどう改善できるかと言う問題は棚上げせざるを得ない．残念ながらディケンズの関心はそこにはなかった．

ディケンズが『オリバー・ツイスト』で描く善人たちは類型化していて，人間的魅力に欠けている．一方オリバーを悪の道に引き込もうとする悪役のほうは，ユダヤ人のフェイギン，強盗のサイクスを筆頭にリアリティにあふれている．フェイギンはフェイギン以外の何者でもなく，サイクス然り，つまり個性がはっきりしているのだ．一方善人の側は，後々オリバーの父の親友であることがわかるブラウンローが筆頭に上げられるが，物腰と言い，オリバーへの態度と言い前述の治安判事と人間性において区別をつけがたい．悪人の生活は生活の困窮であったり，生き延びる手段の模索であったり，具体性にあふれている．一方善人の方は，生活が充足しているのでリアリティが希薄であるし，活力に欠けているようにみえるのだ．批評家の中には，読者は建て前では悪人たちに反感を感じるが，その実悪人たちと作品の後半をともにし，「自分たちの利益のために社会を運営する紳士たち」に対して戦っていると指摘するものもいる．[11] この「紳士たち」が意味しているのは白チョッキを着た救貧委員ではあるが，直接自分の手を汚さずに建て前として生活に困った人を救うべきだと言う上流階級の欺瞞も避けて通ることはできない．ワークハウスの収容者と直接対応する教区吏のバンブルや救貧委員の小悪党振りを批判するだけではなく，救貧法やワークハウスが原理的，システム的にはらんでいる問題を見直す必要があったことは言うまでもない．しかしこの問題にもディケンズの関心は向けられていない．

オリバーは煙突掃除夫の弟子になることは免れたが，葬儀屋の徒弟になることになる．そこで

オリバーは今までとは異なった人種との摩擦を経験する．葬儀屋の主人は子どもの葬儀の行列には，小さい子どもをお供に使ったほうがいい演出になると考えて，オリバーを弟子にすることにする．葬儀屋の家族は，妻と娘，それから店の使用人でオリバーより年長のノアがいる．葬儀屋は仕事上の利益を考えてオリバーを雇うのだが，他の三人はワークハウス育ちのオリバーに偏見を抱いている．特にチャリティー・ボーイのノアにとって，オリバーはうってつけのいじめの対象になった．

> 'I kicked,' replied the charity-boy.
> 'Did you want a coffin, sir?' inquired Oliver, innocently.
> At this charity-boy looked monstrous fierce; and said that Oliver would stand in need of one before long, if he cut jokes with his superiors in that way.
> 'Yer don't know who I am, I suppose, Work'us?' said the charity-boy, in continuation: descending from the top of the post, meanwhile, with edifying gravity. (OT, 76)

ノアがオリバーのことを呼ぶ“Work'us”には“Jackass”の響きも聞き取ることができるので，「ワークハウス育ちの馬鹿野郎」という罵り言葉になっている．一方ノアのことを“charity-boy”と呼んでいるのはディケンズである．チャリティー・ボーイとはチャリティスクール（慈善学校）に通う子どものことを意味している．慈善学校とは，十八世紀に誕生した初等教育の学校で，個人からの寄付金によって維持され，経営母体は教会であった．生徒には青い色の制服が無償で与えられ，授業料もとらず，貧しい家庭の子どもを教育によって救済することを目標としていた．個人からの寄付によって維持される点で慈善学校と名づけられたものであろう．もっとも母体が教会であるのだからキリスト教の助け合いとしての憐れみ（ピティ）のニュアンスもこめられていると考えられる．何もしないで放っておけば学校に通うことができない貧しい家庭の子どもに教育の機会を与えようと言うものである．

ここでチャリティに関して英語と日本語のズレをまとめておきたい．英語においてはキリスト教の神の人間に対する愛，人間の神に対する，他の人間に対する愛をチャリティはそもそも意味していた．聖書の中にチャリティの源泉を求めるなら，それは困っている隣人を助けるという素朴な感情に基づいている．

> When there is among you a needy-person
> from any-one of your brothers, within one of your gates
> in the land that YHWH your God is giving you
> you are not to toughen your heart,
> You are not to shut your hand
> to your brother, the needy-one.[12]

この文章は旧約聖書の『申命記』から取ったものなので，正確にはユダヤ教における同胞意識

が根底にあって，ユダヤ人同士の助け合いの意識を読み取るべきなのだろう．しかし，それがキリスト教へと発展したことは言うまでもない．キリスト教が誕生し，社会に浸透し始めると，金持ちもキリスト教を信仰するようになってくる．そもそも貧しい者の方が金持ちより救済されるとキリスト教では考えられていたので，金持ちは貧しいもののためにお金を寄付し，自分の罪を軽減する贖罪という考え方が生まれてきた．日本人がチャリティと言う場合の意味はここに由来しているし，チャリティスクールのニュアンスもそれと大差ないであろう．日本語では「寄付」ないしは「募金」の意味合いでチャリティは理解されているが，現代の英語においてチャリティの意味はさらに変化を遂げている．1853年に慈善事業監督法“Charitable Trust Act”が成立し，その下にチャリティー委員会なるものが発足した．この委員会は現在にまで引き継がれているが，チャリティの意味は慈善から離れて，NGO活動を意味するようになっている．[13]

再び『オリバー・ツイスト』に話を戻すが，葬儀屋のオリバーの先輩ノアは自分がチャリティ・スクールの出身であることに恥ずかしさを感じていて，そのコンプレックスをぶつける対象としてオリバーは格好の的となった．

> Noah was a charity-boy, but not a workhouse orphan. No chance-child was he, for he could trace his genealogy all the way back to his parents, who lived hard by; his mother being a washwoman, and his father a drunken soldier, discharged with a wooden leg, and diurnal pension of twopence-halfpenny and an unstable fraction. The shop-boys in the neighbourhood had long been in the habit of branding Noah, in the public streets, with the ignominous epithets of ‘leathers’, ‘charity’, and the like; and Noah had borne them without reply. But, now that fortune had cast in his way a nameless orphan, at whom even the meanest could point the finger of scorn, he retorted on him with interest. This affords charming food for contemplation. It shows us what a beautiful thing human nature may be made to be; and how impartially the same amiable qualities are developed in the finest lord and the dirtiest charity-boy. (OT, 77-8)

身元知れずのオリバーと比べて，洗濯女を母に，戦争で障害を負った飲んだくれの父を持つノアはそれだけでも恵まれているのだが，ディケンズの筆はむしろ皮肉にあふれている．ノアの不幸を確実にするのは，慈善学校の生徒であったための屈辱感だ．周りの人間が慈善学校の生徒をなぜ色眼鏡で見たかと言えば，キリスト教における慈善の概念が普通の人間たちから失われたことが理由として挙げられる．慈善学校に通うことは，宗教上の罪人に贖罪の機会を与えることではなく，自分の家の貧しさを第三者に公開することに他ならなかった．

われわれはノアとノアを作り出した社会のどちらを非難すべきなのだろうか．周りの人間から「チャリティ」と呼ばれても，ノアはそれに耐え抜いてきた．そのノアの前にあらわれたのがワークハウス育ちのオリバーである．蔑まれるばかりだった者が自分より弱い人間を目の前にし，自分の受けてきた仕打ちをその相手に向けるとき，復讐されるのは社会そのものではないだろうか．あるいは，ノアはかつて弱者であった自分をも攻撃しているともとらえることができる．社会的

強者が弱者にむけるあざけりの気持ちをノアはだまって被ってきた．その限りでは被害者である．しかし新たな弱者オリバーを攻撃するとき，ノアは強者の立場につき自分が被ってきた差別の構造を容認することになる．弱者であったときに自分が受けた強者の差別意識やかつて弱者であった自分の存在を認めてしまうことになる．オリバーに対するノアの悪意は彼の本来の人間性に由来するよりは，社会が彼に行った仕打ちの反映である．ディケンズの皮肉の矛先も，弱者への差別意識は身分の上下なく生まれる点にある．その点では人間の感情のもろさが問われているのだが，それを社会の問題と考えることもできる．

ディケンズは同じ弱者ではあっても，ノアとオリバーの性格を異なったものにしている．その結果，両者が社会と関わる際の違いが生まれている．オリバーは後半になるにしたがって，受動的な側面が強くなる．しかし，前半部ではワークハウスで感じた不安感や恐怖感を率直に表現している．特にオリバーの感情が爆発したのは，ノアがオリバーの母について侮辱的な発言をしたときだった．

> '... and I'm very sorry for it; and I'm sure we all are, and pity yer very much. But yer must know, Work'us, yer mother was a regular right-down bad'un.'
>
> 'What did you say?' inquired Oliver, looking up very quickly.
>
> 'A regular right-down bad'un, Work'us,' replied Noah, coolly. 'And it's a great deal better, Work'us, that she died when she did, or else she'd have been hard labouring in Bridewell, or transported, or hung; which is more likely than either, isn't it?'
>
> Crimson with fury, Oliver started up, overthrew the chair and table; seized Noah by the throat; shook him, in the violence of his rage, till his teeth chattered in his head; and, collecting his whole force into one heavy blow, felled him to the ground. (OT, 88)

ノアがこれだけの悪態をつける理由は，自分が同じようなことを言われつづけてきた点に求められる．オリバーの母を愚弄する言葉としては，見事なものである．それだけに，オリバーの怒りも尋常ではなくなるわけである．自分のことを「ワークハウスのばか野郎」と言われてもオリバーは反抗をしなかった．しかし，母のことを悪し様に言われ，生きていたならブライドウェル刑務所に入られたか，縛り首にでもなっている性悪女だと言われ，オリバーの怒りは爆発する．ブライドウェル刑務所は当時，政治犯，宗教上の罪人，売春婦を収容していた．オリバーの母はワークハウスにたどり着き，オリバーの出産を終えると亡くなってしまった．オリバーにとって母は唯一の肉親であり，母のことを愚弄されることは，自分のプライドを傷つけられることになる．仮にノアが同じように自分の肉親のことを馬鹿にされたならどうしただろうか．恐らく，今まで通りに耐えるばかりではないだろうか．それに対してオリバーは自分の唯一の誇りを守るために暴力に訴えたのであろう．

ノアといざこざを起こした後オリバーは葬儀屋を飛び出し，ロンドンに向かい，そこで子どもを使ってスリを行わせ，盗んだ品物を処分する故買商のフェイギンの一味に入れられる．他の仲間がスリをはたらいた際にオリバーだけが逃げおくれ警察に捕まってしまう．しかし，スリの実

行犯ではないことが証言され，父の友人であることが後になってわかるブラウンローとオリバーは運命的な出会いをはたす．オリバーはブラウンローの邸宅で数日を過ごし贅沢な生活を味わうものの，フェイギン一味につかまりアジトに拉致され強盗の手伝いをさせられることになる．オリバーがロンドンに出てからの小説は所謂ピカレスク・ロマンと呼べる部分で，オリバーをめぐって善と悪の世界がせめぎあっている．そこに，オリバーの誕生にまつわる謎と謀略がからみあってプロットは推進して行く．

後半になって登場する善良で明るい世界の人物たちの代表は，先に上げたブラウンローと，ローズの一家である．ローズは作品の結末でオリバーの母の妹であることが明らかになる．善良な人たちの中でも，オリバーに対してローズはひときわ親切にしてくれる．ローズとオリバーの出会いをもたらしたのは，強盗未遂事件だった．フェイギン一味に連れ戻されたオリバーは，強盗のサイクスにあずけられ田舎にあるローズの邸宅に強盗に入る．しかし侵入は失敗し，オリバーは鉄砲で傷を負いその場に取り残され，ローズ家に救いを求める．ローズ家では議論の末，強盗の一味であるとは言え，傷を負っているのだから介抱してやることになる．

> ..., the younger lady glided softly past, and seating herself in a chair by the bedside, gathered Oliver's hair from his face. As she stooped over him, her tears fell upon his forehead.
>
> The boy stirred, and smiled in his sleep, as though these marks of pity and compassion had awakened some pleasant dream of a love and affection he had never known. (OT, 268)

オリバーが眠っている最中に二人ははじめて出会うことになる．ベッドの横に座り額にかかった髪を整えてやるローズは，オリバーの寝顔とこの子どもが強盗の一味であったことを考えて涙をこぼしたのだろう．その涙がオリバーの顔に落ちた時，オリバーの寝顔に笑みが広がる．憐れみと同情ゆえの涙が初めて感じる愛情の夢を呼び起こしたかのように．感傷的な部分ではあるが，幸福を描く際のディケンズの巧みさが十分うかがえる．

あどけない寝顔のオリバーを囲み，様子を診に来た医者，ローズのおばとローズの間で，オリバーが本当に強盗の一味であったのかどうかについて会話がはじまる．ローズのおばがオリバーの笑顔を見て，この子が強盗の一味だとは信じられないと述べると，医者は「悪徳と言うものは様々な形をとるもので，見かけがよいからと言って悪徳が宿らないわけではない」と答える．医者が現実主義者とすれば，ローズとローズのおばは理想主義者，博愛主義者とすべきだろう．

> 'But at so early an age!' urged Rose.
>
> 'My dear young lady,' rejoined the surgeon, mournfully shaking his head; 'crime, like death, is not confined to the old and withered alone. The youngest and fairest are too often its chosen victims.' (OT, 268)

あるいは医者の立場を悲観論と考えることもできる．当時のイギリスの社会状況からすれば，この医者の主張は正当なものであろう．「でもまだこんなに小さいのに」というローズの思いは，気持ちとしては理解できるが，説得力は持ちにくい．それではとローズは，このいたいけな子どもが自らすすんで悪党の仲間になったとは思えないと反論する．それに対しても医者はおおいにありうることだとほのめかす．

オリバーが悪党の仲間だとして，根っからの悪人なのかどうか，自らすすんで仲間になったのかどうかが議論の的となり，ローズの旗色は芳しくなかった．そこでローズは最終弁論に入る．

> 'But even if he has been wicked,' pursued Rose, 'think how young he is; think that he may never have known a mother's love, or the comfort of a home; that ill-usage and blows, or the want of bread, may have driven him to herd with men who have forced him to guilt. Aunt, dear aunt, for mercy's sake, think of this, before you let them drag this sick child to a prison, which in any case must be the grave of all his chances of amendment. Oh! as you love me, and know that I have never felt the want of parents in your goodness and affection, but that I might have done so, and might have been equally helpless and unprotected with this poor child, have pity upon him before it is too late!' (OT, 268-9)

このまま警察の手にゆだねてしまえば，オリバーは刑務所に入れられ改心の機会を失ってしまう．ローズの主張の論点は，子どもの生育に必要な愛情や環境がなかったために悪の道に迷ったのなら，憐れみをかけてあげたいこと．その背景には，自分も親のいない子どもだったとの意識がある．子どもであっても悪人は悪人だと医者は考えていたが，ローズはオリバーが悪の道に引き込まれた理由を考えようとしている．

上の引用で注意すべき点はローズがオリバーに「憐れみ（ピティ）」をかけてあげようと述べている点である．実は『オリバー・ツイスト』の冒頭の部分でディケンズはこの「憐れみ（ピティ）」という言葉を使っていた．ワークハウスの孤児は教区委員のやさしい慈悲（マーシー）を受けることはできても，「みんなに軽蔑され，誰にもかわいそう（ピティ）に思ってもらえない」とディケンズは書いていた．制度に基づいた扱いを受けることは可能だが，「憐れみ（ピティ）」という人間の自然な感情を受けることはできないと解釈していいだろう．とするなら，ローズがオリバーに憐れみをかけてあげましょうと言った時点で，作品の冒頭におけるディケンズのオリバーへの呪いは解けてしまったのではないだろうか．ワークハウスで生まれて育ったオリバーの悲劇は，対等の人間として扱われたり，愛情を与えられたりしないことにあったわけだが，ローズにオリバーへの憐れみの気持ちを持たせることで孤児であることのオリバーの悲劇には終止符が打たれることになる．

『オリバー・ツイスト』の虚構の世界では，孤児が生存するにはワークハウスの環境は望ましいものではなく，制度としての孤児の救済に限界があることが作品の前提となっている．その上で問題を解決するものとしてディケンズが用意したのは肉親の愛情であった．最終的にオリバーを助けたものは，父の親友だったブラウンローと母の妹のローズの存在である．ブラウンローは

スリにあった事件でオリバーと出会った時から，オリバーが自分の友人の子どもかもしれないという予感を感じていた．ローズは自分も孤児であったことから，孤児の境遇に同情を感じオリバーに親切にしようとした．期せずしてローズがオリバーの肉親であったことは偶然ではない．天蓋孤独な孤児に唯一救いの手をさしのべられるのは，社会制度ではなく，肉親であるとディケンズは考えている．とは言えディケンズは社会制度としての援助そのものを否定していると判断するのは性急であろう．制度としての貧困者救済が，仮に理念や志は高くても，実際の運用に際して貧困者の便宜よりも制度の維持のみに力点が置かれたり，実際に運営する人間たちが教条主義に陥った場合をディケンズは作品の前提にしているからだ．その上で，貧困者を助けるには，制度以前に他者への「憐れみ（ピティ）」の気持ちが必要であることを訴えていると考えるべきであろう．その際，まったくの第三者が相手に同情して憐れみの気持ちを持つより，近親者が憐れみの気持ちを持つほうがリアリティがあると判断し，ブラウンローとローズをディケンズは登場させたのではないだろうか．リアリティが持たせられたことを否定はしないが，その分だけ感傷的でお涙頂戴的な設定になってしまったことも事実である．

文学と社会福祉が関係ないわけではないことはもう言うまでもないだろう．『オリバー・ツイスト』の中に新救貧法が運用された十九世紀前半の社会状況を十分読み取ることができたと思う．学問とは様々な事例を集めて，そこから抽象化を経て一つの理念にたどり着くものである．『オリバー・ツイスト』は一人の文学者がその時代をどのように見たかと言う事例として扱うことができる．ワークハウスやそこで養われた子どもたちへの世間の目がどのようなものであったかも伺い知ることができる．そして，手助けを求めている子どもに対してディケンズが何が必要だと考えていたかを知ることは，当時の福祉の状況に一石を投じ得るものであると思うし，他の時代にも共通する問題ではないだろうか．文学作品の強さはそれが書かれた時代を反映すると同時に，その時代を超越し他の時代にも共通する問題意識を読者に突き付けられる点に求められるものだから．

（注）

(1) 坂田周一「本の中で出会った福祉『オリバー・トウイスト』」『アエラ：社会福祉学を学ぶ』，（朝日新聞社，1997年），19頁参照．

(2) Charles Dickens, *Oliver Twist* (London: Penguin Books, 1985), p.45. 以下ここからの引用は引用の末尾に作品名をOTと略し，ページ数を記す．

(3) Robert L. Barker, *The Social Work Dictionary,* (Silver Spring: National Association of Social Workers, 1987), p.175.

(4) 中世の教会に付属していた施設．イギリスにおいては，貧しい老人を収容した個人経営の施設を意味するようになった．

(5) 高島進，『イギリス社会福祉発達史論』，ミネルバ書房，1979年，1-2頁参照．

(6) Richard Ford, “Review of Oliver Twist” in *Quarterly Review,* LXIV, June 1839. ここではMichael Hollington編集による *Charles Dickens: Critical Assessments, Vol.1,* (HELM Information, 1995), p.273から引用した．

(7) 強盗の一味のナンシーは，オリバーを助けようとする点で両義的な性格を帯びている．多くの悪人が根っからの悪人であるのに，ナンシーは強盗であることを相対化できている点でリアリティーのある性格を帯びている．

(8) 高島進，『イギリス社会福祉発達史論』，1-9 頁参照．救貧法の下でどのような児童政策が行われていたか，その実態を説明している．

(9) 松村昌家，『『パンチ』素描集』，岩波文庫，1994 年，166-170 頁参照．

(10) 高島進，『社会福祉の歴史』ミネルバ書房，1995 年，30 頁参照．

(11) アングス・ウイルスン，『ディケンズの世界』英宝社，1979 年，115 頁参照．

(12) Everett Fox (trans.), *The Five Books of Moses* (New York: Schocken, 1995), p.920.

(13) 筆者の手元には，イギリス・チャリティ委員会代表コミッショナーを迎えて 1998 年に日本で開催された「市民セクター支援を考える国際シンポジウム」のビラがあるが，そのビラにはチャリティ委員会について「イギリスの市民活動を支える，最も基本的な組織」と記載されている．また「チャリティ」とは，イギリスにおいては，「慈善団体ではなく一般的な市民活動全般をさす」と注がつけられている．

参考文献

1 北川悌二，『オリヴァ・トウィスト』三笠書房，昭和 46 年．

2 小池　滋，『オリヴァー・トウィスト』講談社文庫，昭和 46 年．この前の年に『世界文学全集 13』として講談社から出版されている．現在はちくま文庫．

3 堺　利彦，『小桜新吉』公文書院，明治 45 年．

4 中山知子，『オリバー・ツウィスト』春陽堂，昭和 55 年．児童が読みやすいように手を加えられている．

5 馬場孤蝶，『オリバー・ツゥイスト』改造社，昭和 14 年．

6 本多季子，『オリヴァ・ツウィスト』岩波文庫，昭和 31 年．

7 鷲巣　尚，『オリヴァ・トウィスト』角川文庫，昭和 28 年．

参考資料

1 デビッド・リーン監督，『オリヴァ・ツイスト』（レーザーディスク）東北新社，1948.